

ウェルギリウス『ゲオルギカ』
----文明国家ローマに生きる人間の課題----

山下太郎

序

ウェルギリウスの『ゲオルギカ（以下Geo.）』は、農耕の技術の教えがより普遍的なテーマと複雑にからみ合い⁽¹⁾、作品の魅力を増す反面、その統一的解释を困難にしている。従来この詩の統一性を探る試みとして、第1巻、第3巻の序歌におけるアウグストゥスの神格化の問題をはじめ、作品全体にちりばめられた各ディグレッションの語る様々なエピソードの分析が重視されてきた⁽²⁾。

本稿ではその成果をふまえ、文明国家ローマに生きる人間の課題が神（ユピテル）の意志との関連でどのように示されているかを検討してみたい。このとき、人間個人の在り方を問うこと、即ち個人の労働(labor)の意味⁽³⁾や、内面の問題としての愛(amor)の意味⁽⁴⁾を問い直すことになるだろう。

1. 文明化（神の意志）と人間の労働(labor)

第1巻の序歌では、農耕技術の発達背後に神の援助と保護の力がはたらいっていることが示されている。例えば、munus(7, 12), numina(10), fauens(18)等の言葉は、神の人間への好意や援助を示す。またネプトゥヌス(12-14)、ミネルヴァ(18-19)、トリプトレモスはそれぞれ馬、オリーブ、犁をはじめ地上にもたらした神として示され、ケレスやリベルと同様に、農耕技術の発展に深く関わっていることがわかる。これらの神の力とは、耕地を保護し、作物を養い、天から豊かに雨を降らせるものである(21-23)。確かに

耕地は人間の知恵と努力の結晶かもしれないが、本来大地が作物を生み出す可能性は、人間が経験から探しあてたものであって、人間の力で作り出したものではない⁽⁵⁾。大地の存在そのものも、天の運行も、人間の発明でも工夫でもない。ウェルギリウスは、このように、人間の力を超越した力の存在を、神の力としてとらえるのである。

しかし、この神の力だけで大地は豊かな実りを生み出すのではない。大地を耕す農夫の労働が神の力と結びつくことによって収穫が生まれると考えられる。序歌の冒頭で、「何が豊かな実りを生むのか、いかなる星座のもとで、大地を耕すべきか」(1-2)と問われているが、農夫はまた、天の運行に注意すべきことが示されている。農夫にとって、自然にはたらく神の力は、はかり知れないものである。慈雨や微風もあるとき突然、嵐となって畑を荒らし、収穫を奪い去る(1.311-334)。この嵐は、ユピテルの意志を反映する(328-329)。しかし、ユピテルは、我々人間が天の運行に注目することによって、このような害を未然に防げるように、確かな合図(signum)⁽⁶⁾を定めたと示される(1.351-355)。即ち、農夫は、より安定した収穫を得る為に、自然法則に関する様々な知識を学ぶことが要求されている(1.50-53)。農夫は、適切な判断力に裏付けられた労働を通じて、自然の中にはたらく神の力を、自らの生活の中に生かすことができるのである⁽⁷⁾。

ところで、1.118-159では、今見たテーマが一般化され⁽⁸⁾、文明の発展、即ち様々な技術の発達による生活の安定化がユピテルの意志であることが示される。ユピテルは、人間の生活に害や困難を与えたが、その理由は、怠惰によって自らの王国が沈滞することを許さず、不安によって人間の精神を鋭くすることを望んだからである(123-124)。その結果として様々な技術が発達したと説明され、労働が全ての困難に打ち克った、と言われる(145-146)。即ち、ユピテルは、文明社会の発展を促すべく人間に害と困難を与えた(129-135)と考えられる。

第2巻の「イタリア賛歌」(2.136-176)ではこのような人間の労働の成果としての高度の文明社会が称えられている。例えば、農耕や牧畜の発達(143

-150), 都市や城塞, 港や防波堤の建築(155-164), 優れた指導者(169-172)等の言及は, 国家の秩序の中で, 高度の文明が生かされていることを示す。しかしながら, このようなイタリアの発展は, 温暖な気候(149)と豊かな天然資源(165-166)を素質に恵まれている人間(167-168)の労働が活用した結果である。この発展を支える基礎条件は, まさしく神の恵みといえるだろう(第3巻「リビア人, スキュティア人の生活⁽⁹⁾」は, これとは対比的に, 極寒極暑における原始的遊牧生活が描かれている)。つまり, イタリアの文明は, この神の恵みを様々な形で生活に生かす人間の努力と工夫の結実であり, ユピテルの与えた人間の課題はイタリアにおいて最も見事に果たされている。これに対し, 第1巻エピローグではローマの内乱が語られ, 文明社会の崩壊の危機が描かれている。内乱では神の意志に適うこと(fas)と背くこと(nefas)が反対になり, あらゆる悪がはびこり, 農耕が顧みられないことが示される(505-508)⁽¹⁰⁾。

ウェルギリウスは, 文明の発展を必ずしも楽観的に描くのではなく, 人間の課題が単に役立つ技術の開発とその応用に尽きるのではないことを示している。文明社会が発展を続ける条件は何か, その逆に, 停滞ないしは破滅に向かう条件は何か。この問題は, 人間の内面の問題と密接に関係することが予想できるであろう。

2. 人間の「愛」(amor)のコントロール

ウェルギリウスは, 第3巻の最初のディグレッション(209-283)で, 全ての動物に共通する「愛」について語っている(244 amor omnibus idem)。ここで示される「愛」とはウェヌス女神(267)が動物や人間の内部にかき立てる愛欲を指している。この「愛」は, 動物も人間も破壊的な行動をとるようになり立てる。「愛」ゆえに牡牛は決闘し(219-241), 若いレアンドロスとヘロの悲劇が生まれた(258-263)。ウェヌス女神に駆り立てられた牝馬らは, グラウコス の四肢を引き裂いた(267-268)。このような「愛」は, caecus

amor(210)とも、durus amor(259)とも表現されているが、同時に炎(ignis 244, 258)と表されたり、荒れ狂う大波に例えられたりもしている(237-241)。即ち、抑制を失った人間や動物の内面は、破壊的な自然の姿を示し、その結果として死を招く破壊的な行動が生じる⁽¹¹⁾。

しかしながら、この「愛」は本来、全ての生物にとって種の永続を可能にするものである。第2巻「春の賛歌」(323-345)では、春にユピテルが雨となり、大地と交わって全ての「愛」を育くむことが言われている(325-329)⁽¹²⁾。即ち、「愛」は死をもたらす破壊力も、生命を生む神秘の力も持っている。しかし、前者はその動物の若さを反映し、適切にコントロールされる限り、人間にとって、役立つ力となる(例えば、3.179-208)。一方、後者は新しい生命を生む力だが、人間はよりよい品種を求めてこの力をコントロールしてきた(3.49-102)⁽¹³⁾。このような動物の「愛」のコントロール(第3巻のテーマと考えられる)は農耕と同様に、神の意志に適う労働と言える。

ところでこの「愛」は、動物と同様、人間の内面にはたらく力でもある。しかし、人間自身の「愛」は必ずしも種の永続にのみ向けられるのではない⁽¹⁴⁾。それは内面の情熱として様々な行為を生む。ここで、Geo.における建設的な「愛」の例⁽¹⁵⁾を確認してみよう。まず農夫は「貪欲な(1.47 avari)」と言われている。この心は、ミツバチの所有欲(4.177 amor habendi)と同様に、不断の労働に結び付く。一方、戦車競技者は、勝利を目指して命をかけるが、それほどまでに名誉への「愛」は大きい(3.112 tantus amor laudum)。さらに、ウェルギリウス自身の例として、かれのムーサへの「愛」は詩作の情熱と結び付く(2.475-477)。ウェルギリウスはまた、パルナッソスの険しい荒地に行くように、甘い「愛」(独創的な詩を書く名誉への「愛」と解される)に魅了されると言う(3.291-293)。

これに対し、第1巻エピローグのローマの内乱(463-514)や、「農耕賛歌」(2.458-542)における富や名声を求める者の争いの例は、マイルズの指摘するように抑制を失った「愛」の導く結果と考えられる⁽¹⁶⁾。ウェルギリウス

にとって、個人の情熱が、例えば農耕に向かうことと、富や名声を求める争いに向かうこととは、その方向性において、明確に区別されるものであった。この相異は、神の意志に適うこと(fas)と、それに背くこと(nefas)の相異として理解できよう(1. 505)。国家の秩序も争乱も、その構成員たる各個人の心の在り方と密接に関連する。ウェルギリウスは、各人の「愛」が、神の意志に適う方向で一致するべきことを考えたであろう。

では、このような個人の「愛」の統一を具体的にどのようにして図るのか。以下、この問題を考察してみたい。

例えば、王権による統一という方法が考えられる。第4巻「ミツバチ社会の特性」(149-227)はこの実例を示すものと見なせる。ここでは、ミツバチが王を中心とした国家の秩序の中で、文明社会を発達させていることが語られる。このようなミツバチの天性はユピテルから授けられたものと言われる(149-152)。たしかにこのミツバチ社会は一見人間社会の手本のように見える⁽¹⁷⁾。しかしその「愛」は国家への献身という方向で統一されているものの(177-178)、王が死ねばミツバチの結束はくずれ、互いに蜜を奪い合い、巣を破壊する(212-214)。このミツバチ社会の描写は、王制の弱点を指摘するものと考えられる⁽¹⁸⁾。

では人間はどうすればよいのか。人間は、自分の「愛」を自覚的にコントロールできる。即ち、善悪の判断をもって自分の行動を反省できる。人間は喜びや悲しみ、幸福と不幸を知っているだろう。ウェルギリウスは自らの意志で正しい行いを選び取る人間の精神を称え、国民が国家の繁栄と発展に自らの喜びを積極的に見出すべきことを考えただろう。先に見たように、この目標に「愛」を向けることは自己の意志を神の意志と一致させることである。この考えが、ウェルギリウスの幸福論として「農耕賛歌」に見出せることを以下確かめてみたいと思う。

まず、「農耕賛歌」における農耕生活と都市生活(富や名声を求める者の生活)の対比に注目してみよう。この対比は次の3つの角度から分析できると思われる。① uirtus の有無(labor をめぐって)、② pietas の有無

(家族愛、友情、祖国愛などをめぐって)、③個人の「愛」が志向するもの。

まず①について、農耕技術を用いた農夫の労働が文明の発達に貢献する行為であることは、すでに見た通りである。ところで、農夫の労働は Geo. を通じ、しばしば兵士の戦いに例えられている⁽¹⁹⁾。それはまた、単に作物を生む行為としてではなく、誉を得る行為(この誉の意味については後で述べる)として(1. 168, 3. 288)示されている。マイルズは、1. 107-110 と Ilias 21. 257-264の関連に注目し、農夫が英雄の徳を持つことを指摘している⁽²⁰⁾。この徳は uirtus とみなせるだろう。

一方の都市生活者は、様々な文明の成果を自己満足の為に消費するだけで、建設的に活用していない⁽²¹⁾。例えば、都市生活には大邸宅(461-462)、美しい亀の甲の側柱(463)、金の衣やコリントスの青銅器(464)、アッシリアの染料で染めた毛織物(465)、オリーブ油と香料の混ぜ物(466)があると言われる。これらの表現は、ルクレティウスの表現(D. R. N. 2. 24-36)に基づき、都市生活の喧騒、華美、贅沢を批判するものと考えられる。このような生活の中に uirtus は見出せない。

次に②について、農耕生活には勤勉な労働と少しのものに満足する心、神を敬う心、そして祖先を敬う心があると言われている(472-473)。このような農夫は、正義と結び付けられている(473-474 *extrema per illos / iustitia excedens terris uestigia fecit.*)。以下、この具体例として、農夫の労働は、幼い孫達、家畜を支えるとともに、祖国を支えることが示されている(513-515)。523-524では、汚れのない農夫の家庭の愛情や慎み深さが示される。農夫はまた、仲間とバッコスを称える祭りをを行い、羊飼いを誘って投槍競技や相撲をして楽しむ(529-531)。この描写は、農耕社会の敬虔さと平和を表している。これらの例から、農耕社会には pietas⁽²²⁾が認められると言えよう。

一方、都市生活者は自分の兄弟の血を浴びて喜び、家庭を捨てて亡命し、異国の太陽の下に新しい祖国を求めると言われる(510-512)。このような生活には、真実の家族愛、友情、祖国愛、敬神は見出せないのである。即ち、

ここに、*pietas* を認めることはできない。

次に③について。①、②をめぐっての両者の際立った相異は、各人の志向するもの、即ち「愛」(*amor*)の方向性の相異としてとらえられる。農夫の収穫を愛し求める心は、不断の労働を促し、自然はその返礼として十分な収穫を農夫に与える。このように、自然と調和した農夫の生活は、正義のモチーフによって示されている。例えば、農夫の労働に応じて十分な生活の糧を生み出す大地は、「最も公正な大地(460 *iustissima tellus*)」と呼ばれている⁽²³⁾。この公正さは偽りを知らない農夫の生活(467 *nescia fallere uita*)を特徴づけ、正義の女神の足跡は農夫の上に印されたとも言われる(473-474)。この「正しさ」とは、*fas*と理解されよう。

しかし、都市生活者に「正しさ」はない。農夫が様々な富(468 *diues opum uariarum*)、即ち自然の中での安らぎ(468 *otium*)や木陰のまどろみ(470 *mollesque sub arbore somni*)を楽しむと言われる一方、富を求める都市生活者は、他人を不幸に陥れ、名声を求めて巧みに権力者に取り入る(503-505)。それは、宝石の杯で酒を飲み、サラの緋色のシーツで眠る為であり、また或る者は、財宝を隠し、埋めた黄金の上で眠るとも言われている(506-507)。ここで、農耕生活と都市生活における「富」と「眠り」の質的差異が、両者の志向する価値の差を象徴的に示していることに気づく。都市生活者は、他人の犠牲の上で手に入れた富を守る為に、不安で眠れぬ夜を送るだろう。一方、農夫は自然の懷に抱かれて、牛の鳴き声(470 *mugitusque boum*)に誘われつつ、安らかな眠りを楽しむのである。農夫は自ら富を求めずとも常に富を手にはしていると言えるだろう。他方、都市生活者の「愛」の方向は、各々自己中心的であるから、互いに衝突し合い、各人は抑制を失った動物のように破壊的な行動を重ねていく。

以上検討したように、「農耕賛歌」における2つの生活の相違点は、単に農業をするかしないかの差を超えて、① *uirtus* の有無、② *pietas* の有無、③「愛」の志向する方向性、の各点において本質的な相異を示すのである。これらの相異はまた、神の意志との関連で、*fas* と *nefas* の区別として理

解できるものである。

では、ウェルギリウスは、我々人間が全て農夫となって働くことを説くのだろうか⁽²⁴⁾。たしかに、かつて黄金のサトゥルヌスが地上で農耕生活を営んでいたことが示されている(538)。しかし現実にはもはやサトゥルヌスの黄金時代ではないことも示される(536-540)。すでに、1.118-159で示されたように、人間は様々な形で(農耕に限らない)自然を利用し、文明化を進めてきた。他方、1.125-126が示唆するように、正義と秩序を守り育ててゆくことも、この文明化の一つの方向とみなしうる。従って、今見たように、「農耕賛歌」を通じて描かれる農夫の生活は、まさに人間が目標とすべき生活の一つの模範(exemplum)と解せるだろう。そして、人間の「愛」(amor)の方向を、神の意志(fas)に一致させる(uirtus と pietas を備える⁽²⁵⁾)ことこそ、詩人が人間に教える理想の生き方なのである。

この問題をもう少し具体的に考えてみたい。私は、ウェルギリウスが「農耕賛歌」で、自分の幸福をエピクロス派のそれと対置している点(2.475-494)⁽²⁶⁾に注目する。ここで、エピクロス派は万物の原因を理解し、死の恐怖を追放した点で幸福であり、一方ウェルギリウスは、農夫とともに、自然を愛し、神々を知る点で幸福であると言われる⁽²⁷⁾。ところで、第3巻「ノリクムの疫病」(470-566)の示す死の恐怖のテーマは、このエピクロス派の幸福論にとって本質的な意味をもつものであり、このエピローグ自体、エピクロス派の詩人、ルクレティウスの『万物の本性について』第6巻にある「アテナイの疫病」(6.1138f.)をモデルにしたとされる⁽²⁸⁾。また、「農耕賛歌」における都市生活者批判も、この詩人の表現を想起させる⁽²⁹⁾。ルクレティウスによれば、人間を富や名声へと駆り立てる諸悪の根元は、死の恐怖であり、唯一、エピクロス哲学の研究と実践がその克服を可能にする⁽³⁰⁾。これらのことから私は、「農耕賛歌」におけるウェルギリウスとエピクロス派の幸福の対置は、死の恐怖をいかに克服するか、というエピクロス派の課題に、ウェルギリウス自身が何らかの解答を与える意志のあることを示唆するものと考えられる。

この問題を考える前に、ここで両者の立場を比較検討しておこう。先に、農夫と都市生活者の相異を3つの角度から分析したが、この農夫の幸福に反映するウェルギリウスの立場とエピクロス派の対置も、同じ3つの角度から分析できるように思われる。即ち、① uirtus の有無 ② pietas の有無 ③「愛」の志向するもの、の3つの点をめぐって、両者を比較してみたい。

まず①について。先に確認したように、農夫の労働は、文明の発展に貢献するものとみなされる。それは、Geo. において、しばしば闘う者の英雄的行為に例えられ、英雄の徳としての uirtus と結び付く。一方、エピクロス派にとって、文明の繁栄と発展は、自己の真実の生き方（内面の平安の実現）には、本質的な関わりを持つのではない。ルクレティウスは、文明化をむしろ否定的にとらえている(D. R. N. 5. 925f.). 少なくとも、ウェルギリウスにとって、このようなエピクロス派の生き方は、 uirtus と結び付くものではなかっただろう。

次に②について。 pietas とは、基本的に神への信服を意味する。この点で、エピクロス派の生き方（神の地上の世界への介入を否定し、魂の安らぎを求めようとする立場）に pietas は見出せない。一方、 pietas は、両親、親族等、他の人間との関係を律するものとも言われる。この点、エピクロス派は、他者との協調を重視する⁽³¹⁾。しかし、エピクロス派にとって、この問題は、国民全体の課題としてとらえられてはいない。単に、エピクロス哲学を共に学ぶ者が、互いを励まし合う、という形での友情が重視されるに過ぎず、この友情そのものが、かれらにとっての最大の課題とも言えないのである。

次に③に関して。ウェルギリウスは、「愛」を様々な活動を促す内面のエネルギー（情熱）をとらえ、これが神の意志と一致するとき、人は幸福にあずかることができると教えた。一方、エピクロス派は、外界に積極的に働きかける意欲を出来る限り抑え、その力を、内面の平安を実現する為に用いることを説く⁽³²⁾。具体的に言えば、エピクロス派は、自然現象を原子論の立場から合理的に解釈し、そこに神の関与を認めない。また、この原子論によ

れば、人間の意識は、死を経験することはないのであり、現実の生をいかに生きるかだけが問題になってくる。従って、エピクロス派は、原子論の立場から、自己の不必要な欲望や恐怖を消去し、平静な心(ataraxia)を得ることを説くのである⁽³³⁾。一方、ウェルギリウスの描く農夫も、労働を通じ、エピクロスの「心の平静」(467 *secura quies*; 468 *otia*)を手に入れる。また、ウェルギリウスは、エピクロス派と同様に、天の運行など、自然法則を学ぶ必要性を強調している。農夫にとって、この知識は、神のメッセージを読み取り、より有効な労働と、より豊かで安定した実りを得る為に役立てられる。他方、エピクロス派にとって、この知識は、神の地上への関与を否定し、自己の内面の平安を得る為の唯一の手段となる。このように、自然に関する知識が両者において持つ意味は、次元が異なると言わざるを得ない。ここで、両者の相異をまとめれば、ウェルギリウスは、個人が「愛」を、他者との協調の中で、文明国家発展の為に活用することを教えるのに対し、エピクロス派は、個人が、「愛」を、自己の幸福の実現に役立てることを教えている。先に、私は、都市生活者がその「愛」を自己の幸福に結び付ける点で批判されているのを指摘したが、このエピクロス派についても、その「愛」の志向するものが自己中心的である点で、ウェルギリウスの理想の生き方とは本質的に異なることがわかる。

ところで、第4巻の「コリュクス人の老人」のエピソード(116-148)は、このエピクロス派の立場を反映している⁽³⁴⁾。この老人はごくわずかの(127-128 *pauca... / iugera ruris*)肥沃ではない(128 *nec fertilis*)土地を活用し野菜や果実を栽培する。このとき、自らの財産が、王の富にも等しいと感じる心(132)はエピクロス派の幸福論を反映すると共に、「農耕賛歌」における農夫の心と共通する。しかし、家族もなく、他者との交流もなく(133)、自給自足の生活を送る点で、この老人の生き方は、家族や家畜を愛し、祖先や神を敬い、祖国を支えると言われる農夫のそれとは、本質的に異なっている。この老人の「愛」の志向するものは、自己を越える存在への献身と言うよりも、むしろ、自己充足、自己満足と見なせるであろう。従って、

このディグレッション自体、「農耕賛歌」におけるエピクロス派批判を反映しているとみなせるかもしれない⁽³⁵⁾。

さて、ここで先に提出した問題にかえる。エピクロス派は、自然法則を研究し、死の恐怖を追放したと言われるが、一方、ウェルギリウスは、死の問題をどの様に考えているのか。Geo.において、この問題に対する具体的な解答は、ルクレティウスの場合と異なり、すぐには見出せない⁽³⁶⁾。エピクロス派と違って、ウェルギリウスにとって、死はどこまでも生を否定するものとして、恐れ of 感情を引き起こすものであっただろう。

しかし、この問題は、むしろ次のように考えることができるかもしれない⁽³⁷⁾。地上の世界で、文明国家ローマの平和と秩序が永続することが、神の意志に適うことである。その為には、個人の「愛」が、この目的に貢献する方向に正しくコントロールされねばならない。ウェルギリウスは、人間の「愛」が自己中心的な方向に向かうとき、あるいは、それが様々な悪と結び付くとき、国家が停滞、ないしは危機を迎えることを教えている。我々が、もし死を恐れ、自己の命にのみ執着し続けるとき、我々は自己中心的でないとは言えないだろう。その逆に、人類の幸福を願い、国家の真の平和と繁栄の方向に、自らの「愛」を進んで向けるものは、自己中心的な思考の枠を超越し、自己の生命と全活動とを、国家の永遠の存続と発展の為に捧げることになる⁽³⁸⁾。即ち、ウェルギリウスの説く所に従って、真に自己完成を遂げた者にとって、自らの命はもはや自分のものではなく、永遠の神の意志と同一化する。この者にとって、死の運命が避けられないことは、もはや何ものでもないだろう。しかしながら、このような理想的人物を、この地上に見出さうのだろうか。私は、この模範(exemplum)として、アウグストゥスが称えられていることに注目する⁽³⁹⁾。

3. アウグストゥスの神格化

アウグストゥスは、「イタリア賛歌」において、ローマの誇る他の優れた

指導者の列挙の最後を飾り、「最高の人(maxime Caesar)」(2.170)と呼ばれる。ここで列挙される指導者(デキウス、マリウス、カミッルス、スキピオ一族)は皆、ローマを他国の侵略から救った英雄ばかりである。つまり、先に示した、個人の果たすべき課題を、ローマへの献身という形で、最大限に実践した者ばかりといえる。同様に、アウグストゥスは、ローマの内乱を平定するとともに、考えうる全世界をローマの支配下に置いた。それはまた、ローマの発展に尽くしてきた数え切れない労働の集積を継承し、それを国家の一層の発展に生かす基礎をつくることでもあった。偉大なローマが危機を乗り越え、より大きな花を咲かせる可能性が、アウグストゥスによって与えられたのである。ウェルギリウスが、アウグストゥスを、ローマの歴史上最高の指導者として称えることは、けだし当然といえよう。

ところで、第1巻エピローグでは、アウグストゥスが、人間界の勝利を気に懸けて行動していることを、天の神々が嘆いていると言われる(503-504)。一方、第1巻序歌ではアウグストゥスが、やがて、神の世界に迎え入れられると言われている(1.24f.)⁽⁴⁰⁾。内乱におけるアウグストゥスの行動を嘆いていた神の世界は、なぜ一方では、かれを喜んで迎え入れると言われるのか。

第4巻の、いわゆるスプラギス(559-566)では、偉大なるアウグストゥスが、底深いエウフラテス川の傍で、戦の雷を放ち、勝者として、服従する人民に法を与え、天への道を進んだと語られる(560-562)。ここで、「雷を放つ」と訳出した *fulminat* という言葉は、アウグストゥスが、ユピテルの意志を自分のものとして戦っていることを暗示する⁽⁴¹⁾。つづいて、アウグストゥスは、戦いに勝利を収めたのち、地上の世界に、公正な法に基づく秩序をもたらしたことが示される。戦いに勝つことは、アウグストゥスの *uirtus* を示すことに他ならず、法の制定は、かれの *pietas* を示すものと考えられる。アウグストゥスは、この点で、つまり地上に平和と秩序をもたらし、*uirtus*と *pietas* の模範を示したことによって、天への道を進むことが許されたのである。

この神格化のテーマをめぐって、第1巻の序歌を再び検討してみたい。こ

の序歌の構成の特色は、前半(1-23)で、農夫の労働と神々の援助が語られる一方、後半(24-42)で、アウグストゥスの神格化が述べられる点であろう。前半で、農耕の発展を援助する神々が呼ばれるが、これらの神々の力は、天界から下降して地上の世界にはたらくものと考えられる⁽⁴²⁾。他方、この神の力を生かし、神の好意に応える農夫の労働や、神への祈りは、地上の人間から天界へのはたらきかけ、即ち、上昇運動として理解されよう。これら2つの運動の結実として文明の発展と、それに伴う人間社会の繁栄が考えられる。一方、後半のアウグストゥスの神格化は、地上の世界から天界への上昇運動とみなせるだろう。しかし、アウグストゥスは、やがて他の神々と一致して、地上の文明の発展を助けるとともに、天秤座の星として、人間の祈りに応え、人々に公正の精神を教えるだろう(下降運動)。即ち、アウグストゥスは、神と人間の間に立つ者(各々の立場を代表しうる)として、人間社会の発展を願う神の力(天から地へのはたらきかけ)と、人間の労働と祈り(地から天へのはたらきかけ)との調和を保つ。

ところで、この天秤座は、乙女座とさそり座の間に位置し、公平、公正、調和を象徴している。乙女座とは、「農耕賛歌」で、農夫のもとに最後の足跡を残したと言われる正義の女神(2.474 Iustitia)の星座である。一方、燃え上るさそり座は、その腕を引いて、来たるべきアウグストゥスの星座に場所を空けていと示される(1.34-35)。この「燃え上る(ardens)」という表現は、第3巻序歌で言及されるアウグストゥスの「熱い戦い(46 ardentis ... pugnus)」を暗示するとともに、その uirtus を示唆している。地上において、アウグストゥスが、武勇(uirtus)と正義(pietasと関連する)の調和のもとにローマの平和をもたらしたことは明らかである⁽⁴³⁾。アウグストゥスは、神となった後も、地上の平和と秩序を守る神として、正義と武勇の星座の間で、両者の調和を保つことが期待されている。

さて、以上のように、アウグストゥスの神格化は、宇宙の秩序を守る上で重要な意味を持つが、それは同時に、死を恐れる人間に対し、生きる希望と勇気を与え、生の意義を教えるものと考えられる。ウェルギリウスは、第3

卷の序歌で、アウグストゥスの名声を、永遠に伝える意志を表明しているが(46-47)、ここで示される *nomen* と *fama* という表現は、ローマ人にとって重要な「誉」の概念を示す⁽⁴⁴⁾。ウェルギリウスは、人間の課題として、文明国家ローマの平和と繁栄(この繁栄自体 *laus* と表現されている: 2.138, 174)に貢献することを教えた。人がもし、この方向に自己の「愛」を向けるとき、農夫も、戦車競技に参加する者も、そして、ウェルギリウス自身も、等しく「誉」にあずかることができる(農夫の例: 1.168 神の畑を持つ誉(*gloria*); 3.288 *labor* を通じて希望すべき誉(*laus*), 戦車競技者の例: 3.102 勝利の誉(*gloria*); 3.112 勝利の誉(*laus*), 詩人の例: 4.6 詩作の誉(*gloria*)など)。これに対して、「農耕賛歌」で描かれる都市生活者は、真の目標を失い、偽りの誉を求めている。なぜならかれらは、世俗的名声と、富に囲まれて生きることが真の誉と考えるからである。さて「農耕賛歌」において、この区別は、個人の「愛」の方向性の相異として理解された。今、この相異は、個人の愛し求める「誉」の意味の相異----真の誉と偽りの誉の区別----として理解することができよう。人には、その様々な立場において、等しく「誉」を得る道が開かれているのである。例えば、*uirtus* と *pietas* において卓越する農夫は、例えその存在が、地味で目立たないものであろうとも、アウグストゥスとともに、神の指し示す道(「誉」を得る道)を歩むことになる。ウェルギリウスは、このように、全てのローマ国民に、使命感を持って生きるべきことを教え、それによって、永遠のローマの精神的支柱を確立した。

ウェルギリウスは、このような自己の業績を、単に教訓詩の伝統を独創的に発展させたものとみなすだけでなく、アウグストゥスの偉業と対置している。即ち、第1巻序歌の後半では、アウグストゥスの神格化(アウグストゥスの未来の存在)が語られるのに対し、第3巻の序歌⁽⁴⁵⁾では、アウグストゥスの業績を語ることによって、自ら天を目指す、ウェルギリウスの決意(未来の叙事詩の約束)が示されている⁽⁴⁶⁾。このような、アウグストゥスと詩人の対置は、第4巻のスプラギスにおいても認められる⁽⁴⁷⁾。ここでは、

アウグストゥスについて、その過去（内乱における戦い）、現在（勝者として人民に法を与えること）、未来（神となること）が言及される。一方、ウェルギリウスについては、過去に牧歌を歌った詩人が、今 Geo. を歌い終わったことが示されている。つまり、詩人の未来についての言及はなされていない。また、アウグストゥス自身、天への道を目指して進んだと言われるだけで、その神格化は、今のところ未完成である。即ち、詩人による未来の叙事詩の完成が、アウグストゥスの神格化を可能にすることが、ここで暗示されるのである。

Geo. は、これまでみてきたように、表向きは、農耕について説いた詩であるが、同時に自然にはたらく神の力を、人類のよりよい生活に生かすこと、即ち、労働(labor)の真の意義を語るとともに、人間や動物の心にはたらく神の力、即ち「愛」(amor)を正しく活用することを教えている。アウグストゥスはローマの内乱を平定し、ローマに平和と繁栄をもたらすことに、自らの「愛」を傾けた。一方、ウェルギリウスは、Geo. において、ローマ人の「愛」が、神の意志と一致するべきことを説き、国民が、アウグストゥスの業績を継承し、ローマを永遠に守り、発展させていくことを期待した。ウェルギリウスは、この点に、Geo. の独創的意義を自覚し、それをアウグストゥスの業績と対置したものと思われる。

注

(1) オーティスは、Geo. 1.41: *ignarosque uiae mecum miseratus agrestis* と、ルクレティウスの 2.9-14 との関連を指摘し、ウェルギリウスの創作意図が、教訓詩人として、単に農夫だけでなく、広く人間に、生きる道を教えることにあると言う。B. Otis, *Virgil. A Study in Civilized Poetry*, Oxford 1964, 154-155.

(2) Geo. のディグレッションとして、次の11箇所が挙げられる。1. 118-159 (ユピテルの意志), 1. 463-514 (内乱), 2. 136-176 (イタリア賛歌), 2. 315-345 (春の賛歌), 2. 458-542 (農耕賛歌), 3. 209-283 (愛), 3. 339-383 (リビア人, スキュティア人), 3. 470-566 (ノリクムの疫病), 4. 116-148 (コリュクス人の老人), 4. 315-558 (アリストエウス物語)。ただし、本稿では、第4巻の「アリストエウス物語」の解釈には立ち入らない。

(3) ウィルキンソン は、ユピテルの意志としての労働の意義に注目する。L. P. Wilkinson, *Virgil's Theodicy*, CQ n. s. 13, 1963, 75-84.

(4) Geo. の「愛」(amor)の解釈としては、G. B. Miles, *Georgics* 3. 209-294: *Amor and Civilization*, CSCA 8, 1975, 177-197 が詳しい。一方、動物と人間の比較から「愛」と死に注目する考察としては、W. Liebeschuetz, *Beast and Man in the Third Book of Virgil's Georgics*, G&R 12, 1965, 64-77.

(5) *quique nouas alitis non ullo semine fruges* (1. 22) という表現は、農耕技術とは無関係に作物を生み出す大地の力が、神の力として表されることを示す。

(6) *signum* は、第1巻後半に頻出する (1. 229, 239, 257, 263, 351, 354, 394, 439, 471)。1. 118-159 で、1-2 の *terram uertere* が示す労働の必要性が、ユピテルの意志として説明されているように、1. 351-355 においても、*quo sidere* (1. 1) が示す天体の観察の必要性が、ユピテルの意志として示される。ここで注意すべき点は、*signum* は単に悪天候を告げる徴であるばかりか、人間社会の悪を気付かせる (439, 471) 点である。厳しい自然の脅威は、人間の精神を鋭くする為に、ユピテルが与えた害と言われる (1. 118-159) が、同様に、人間社会の悪も、人間に与えられた一つの試練とみなしうる。

(7) 農夫の労働は、自然の中の相反する要素のバランスを実現することであり、それが、戦闘を暗示する表現を伴いながら、自然への暴力ととらえられることをロス是指摘する。D. O. Ross, *Virgil's Elements*, Princeton

1987, 45-51.

(8) ロスは、1. 43-203 が、ワッローの *De Re Rustica* の構成とテーマの影響を受けている点を明らかにしている。しかし、1. 43-203 には農耕論から文明論へのテーマの拡大というパターンが認められ、ロスは、そこにウェルギリウスの独創性を見ている。Ross, *op. cit.*, 38-54, 74-83, esp. 38-43.

(9) 3. 339-383 について、これをディグレッションとみなす立場（例えば、W. Richter, *Vergil: Georgica*, München 1957, 411）とみなさない立場（B. Otis, *op. cit.*, 150）がある。ちなみに、ジョンストンは、3. 339-383 に示される遊牧生活が、農耕生活と対比的に描かれる点に注目し、「アリスタエウス物語」における、アリスタエウスとオルペウスの対比との関連を考察している。P. A. Johnston, *Vergil's Agricultural Golden Age*, Leiden 1980, 106-124.

(10) *fas uersum atque nefas*(505) は、*euerso ... saeclo* (500) と対応する。これらの表現に見られる *uertere* のモチーフと、農夫の労働との関連については、cf. M. C. J. Putnam, *Virgil's Poem of the Earth*, Princeton 1979, 75-76.

(11) cf. Miles, *op. cit.*, 186.

(12) 「春の賛歌」(2. 323-345)と「愛」(3. 209-283)は、次のような表現上の対応を示す。① *uer* の反復(*uer*: 2. 323, 338, *uere*: 2. 324 と *uere*: 3. 272 の対応)。② *Venus* (ウェヌス女神)への言及(*Venerem*: 2. 329 と *Venus*: 3. 267 の対応)。③ 風への言及(*Zephyrique*: 2. 330, *Austros*: 2. 333, *Aquilonibus*: 2. 334, *Euri*: 2. 339 と *Zephyrum*: 3. 273, *Eure*: 3. 277, *Borean*: 3. 278, *Caurumque*: 3. 278, *Auster*: 3. 278 の対応)。

(13) cf. E. M. Stehle, *Virgil's Georgics: The Treat of Sloth*, TAPA 104, 1974, 358.

(14) cf. Miles, *op. cit.*, 191, 194.

(15) cf. Johnston, *op. cit.*, 100-101.

(16) マイルズは, 2.503-504: *sollicitant alii remis freta caeca ruuntque / in ferrum...* が, 3.244: *in furias ignemque ruunt* と3.260: *nocte natat caeca serus freta* を想起させる表現であると指摘している. Miles, *op. cit.*, 190.

(17) グリフィン¹⁷は, このミツバチ社会には, 詩的要素(愛の悲哀など)が欠けている点で, ローマの欠点としての芸術理解の貧困を示すと解している. J. Griffin, *The Fourth Georgic, Virgil, and Rome*, G&R 26, 1979, 62-65.

(18) cf. Stehle, *op. cit.*, 360.

(19) cf. A. Betensky, *The Farmer's Battles, Virgil's Ascraean song* ----Ramus *Essays on the Georgics*----, Bristol 1979, 108-117.

(20) G. B. Miles, *Virgil's Georgics*, California 1980, 76-78.

(21) 農耕生活と都市生活の対比の分析として, cf. F. Klingner, *Über das Lob des Landlebens in Virgils Georgica*, Hermes 66, 1931, 159-189.

(22) 岡道男, 古代叙事詩の序歌----「アエネイス」について----, 『西洋古典学研究』 26, 1978, 4-8 参照.

(23) パトナム²³は, 現実のユピテルの支配する世界では, 大地はもはや“spontaneous”でも“just”でもないという. Putnam, *op. cit.*, 143-144. しかし, *facilem uictum*(2.460)は, 物理的に大量の収穫と解する必要はないであろう.

(24) ジョンストン²⁴は, 農耕とサトゥルヌスの関連(2.538)を重視し, 新しい文明社会における農耕の意義を強調する. Johnston, *op. cit.*, 102-105. しかし, ウェルギリウスは, ローマの産業構造が永遠に農耕を中心とすべきである言うのではなく, むしろ, 農耕生活に見られる正義に普遍的価値を見出しているものと考えられる.

(25) *uirtus* と *pietas* は, 理想的ローマ人の徳目とみなしうる. 岡道男, 上掲論文, 4-8 参照.

(26) クリングナーによれば、エピクロス哲学言及の意図は、農夫の生活を、最も崇高な哲学者の生活に結び付け、農耕生活賛美のテーマの品位を高める為、と解す。Klingner, op. cit., 195.

(27) 493 fortunatus et ille deos qui nouit agrestis において, ille は, 495 以下の ille(495, 498), 即ち農夫を表す。一方, 475-489 の, ウェルギリウスとエピクロス派の対比から考えれば, ウェルギリウスの立場を表すとも考えられる。

(28) cf. R. D. Williams, Virgil: The Eclogues and Georgics, New York 1979, 198-201.

(29) cf. W. Liebeschuetz, The Cycle of Growth and Decay in Lucretius and Virgil, PVS 7, 1967-68, 34.

(30) cf. D. R. N. 3. 36-40, 91-93.

(31) cf. E. E. Sikes, Lucretius, New York 1936 (reissued 1971), 59f.

(32) cf. Sikes, op. cit., 141-142.

(33) cf. D. R. N. 2. 7-13.

(34) cf. P. J. Davis, Vergil's Georgics and the Pastoral Ideal, Virgil's Ascraean Song----Ramus Essays on the Georgics----, Bristol 1979, 30.

(35) 「コリュクス人の老人」をめぐる解釈については、かれを理想的農夫ととらえる立場 (cf. R. Gustin, Labor Improbis, LEC 28, 1960, 284) や、美を求めるギリシア人とみなす立場 (cf. C. G. Perkel, On the Corycian Gardener of Vergil's Fourth Georgic, TAPA 111, 1981, 167-177) 等, 様々である。

(36) Geo. には, ストアの死生観も言及される。cf. 4. 225-227: scilicet huc reddi deinde ac resoluta referri / omnia, nec morti esse locum, sed uiua uolare / sideris in numerum atque alto succedere caelo. cf. Liebeschuetz, The Cycle of Growth and Decay in Lucretius

and Virgil, 36.

(37) 以下の考察は、岡道男、ウェルギリウスの英雄像、『ギリシア・ローマの神と人間』、東海大学出版会、昭和54年、343-373, esp. 366-373 に負う所が大きい。

(38) この問題をいわゆる黄金時代再現のテーマと結び付ける考察としては、cf. I. S. Ryberg, *Vergil's Golden Age*, TAPA 89, 1958, 112-131, Johnston, op. cit.

(39) キケロの「国家論」における理想的指導者像の考察として、岡道男、キケロの「国家論」-----その指導者像(2. 51)をめぐって-----、『法制史研究』34, 1984 参照。

(40) パトナムは、第1巻序歌の *urbis*(25) と *orbis*(26) が、第1巻エピローグの *orbem* (505), *urbes* (510), *orbe* (511) と密接に対応すると言う。Putnam, op. cit., 25 n. 13.

(41) cf. Putnam, op. cit., 322.

(42) cf. 1. 23 *demittitis*. Geo. における上昇と下降のモチーフを分析したものとして、S. P. Bovie, *The Imagery of Ascent-Decent in Vergil's Georgics*, AJP 77, 1956, 337-358.

(43) この点で、アウグストゥスは、やがて『アエイネス』で示される理想的ローマ人の徳目(*uirtus* と *pietas*)を備えている。岡、上掲論文(古代叙事詩の序歌), 4-8 参照。

(44) 岡、上掲論文(ウェルギリウスの英雄像), 365-370 参照。

(45) 第3巻序歌の解釈としては、内田次信、「ヘシオドス、カリマコス、ウェルギリウス」-----創作理念の系譜-----、『西洋古典論集』3, 1987, 京都大学文学部西洋古典研究室, 28-33 参照。

(46) この2つの序歌は、構成上、緊密に対応している。まず、1. 24-42 は、次のような構成を示す。a. アウグストゥスの未来(神格化)がまず簡潔に言及され、つづいて、その具体的内容が人称代名詞(*tu*)の反復とともに示される(24-39)。b. 冥界のモチーフが認められる(36-39)。c. アウグ

ストゥスが今為すべき行いが示される(40-42). d. アウグストゥスの未来(神格化)が示される(42). 一方, 3. 1-48 について, a'. 詩人の未来(叙事詩完成)が簡潔に示されたのち, その具体的内容が, 人称代名詞(ego)の反復とともに表現される(8-39). b'. 冥界のモチーフが認められる(37-79). c'. 詩人の今為すべき行いが示される(40-45). d'. 詩人の未来(叙事詩完成)が示される(46-48). つぎに, 各々の直後のディグレッションについて見ると, 1. 118-159は labor のテーマ, 3. 209-283 は amor のテーマを示す。ローマの統一におけるアウグストゥスのはたらきは, 人間として最大の labor と言える。一方, ウェルギリウスの詩作は, 国民の内面(amor のテーマと関連する)を正しい方向に導くものである。即ち, 1. 118-159 と, 3. 209-283 のテーマの対比は, 第1巻序歌と第3巻序歌のアウグストゥスとウェルギリウスの対置と響き合う。(ちなみに, アウグストゥスを示すCaesarの語の認められる箇所: 1. 25, 1. 503, 2. 170, 3. 16, 3. 47, 3. 48, 4. 560 は, 第4巻のスプラギスを除けば, 全て, 第3巻序歌以前に集中している。)この対置との関連で, Geo. のディグレッションと第1巻及び第3巻の序歌の示す構成は<付図>のようになると考えられる。

以下, 各々の対応, 対比関係に説明を加える。

① 1. 118-159 と 4. 116-148 及び 4. 149-227 について。前者で示される人間と人間社会の課題に対し, 後者で, その課題の克服例が示されている。

② 1. 463-514 と 3. 470-566 について。共に文明社会の崩壊の危機が示されている。

③ 2. 136-176 と 3. 339-383 について。前者で, 神の恵みを生かした文明化の例が示されているのに対し, 後者では, 厳しい自然環境の為, 文明が十分に発達しない例が示されている。

④ 2. 315-345 と 3. 209-283 について。前者では, 種の永続を可能にする「愛」がポジティブに描かれているのに対し, 後者では, 破壊的行動を描く「愛」がネガティブに示される。

⑤ 2.458-542 と 3.1-48 について。共に、ウェルギリウス自身の心境や思想が語られている。

(47) スプラギスの解釈については、大西英文、「ブーコリカ」から「ゲオールギカ」へ、『西洋古典学研究』28, 1980, 44-55.

(付記： 使用したテキストは、R. A. B. Mynors(ed.), P. Vergili Maronis Opera, O. C. T. 1983)

<付図>

1. 1-42	序
118-159	ユピテルの意志
463-514	内乱
2. 1-8	序
136-176	イタリア賛歌
315-345	春の賛歌
458-542	農耕賛歌
3. 1-48	序
209-283	愛
339-383	リビア人スキュティア人
470-566	ノリクムの疫病
4. 1-7	序
116-148	コリュクス人の老人
149-227	ミツバチ社会の特性
315-558	アリストエウス物語
559-566	スプラギス